

## 大牟田でインソール生産開始

私たちが開発したインソール(Anatomical Fußbett)の大牟田(福岡県)での生産が始まっています。

かつて大牟田は、三井三池で有名な炭坑の街として、日本の近代化を支える大産業都市でしたが、石炭から石油へのエネルギー転換によって、1960年代以降は衰退の一途を辿ってきました。そのような大牟田では、かつての「炭都の繁栄」とは違った「福祉の街」としての地域再生を目指す人たちが、障害者の就労・生活支援や高齢者のための「託老所」の運営、また福祉や健康関連事業による商店街の活性化等々と、多様な活動を地道に続けています。

その方たちが、「足の健康啓発運動」に着目し、ドイツ整形外科靴技術を自分たちの活動の中に取り込み、「足と靴の相談室ぐーぱ」の事業展開に着手したのが5年前でした。今では、大牟田周辺だけではなく、福岡県内外から足や脚の疾患、障碍でお困りの方たちがたくさん来られ、地元の整形外科医や市立病院のドクターとの連携によって、多くの方たちに靴や装具の提供を行ない、たいへん感謝されています。

「ぐーぱ」を運営している「NPO法人福祉でまちがよみがえる会」は、このようなドイツ整形外科靴技術による医療・福祉分野の活動を充実・拡大させる一方、このかん、この技術の日本への普及活動自体に障碍者が主体的に参加できる道を追求してきました。それが、私たちが開発したインソール(Anatomical Fußbett)の生産を、障碍者も働ける事業として大牟田で実現しようというものでした。



広がって、工場も併設された「足と靴の相談室ぐーぱ」明るく、広々とした店内



このインソールは、私たちが、多くの日本人の足のデータから設計した形状を、韓国で開発されたコルク粒を水溶性の接着剤だけで成型する技術によって製品化したものでした(ドイツ製のものはゴムか樹脂による成型のため通気性がない)。それは、日本人の標準的な足の骨格に対応しているだけでなく、通気性、吸湿性に優れ、日本の風土に適しているという点からも、他に類を見ない画期的なインソールとして筑波大学の先生方によって検証もされ、私たちが提供する靴のいわば「心臓部」になっているものです。

そのようなものですから、私たちとしても、韓国への委託生産ではない日本での生産を願ってはいましたが、簡単に実現でき

ることになっています。

このようなファーストシューズから学齢期までの、まさに子供の足の骨格形成期に対応した徹底的に機能性にこだわった靴の開発は、日本では初めてのことで、子供サイズの部材の多くは特注品となり、成人用の同等のものよりもコストがかかるものも少なくありませんでした。

私たちとしては、大学との共同開発ということもあり、ただただ機能性(子供たちが履きたくなるためのデザイン性も含めて)を追求することに徹しました。とにかく、満足のできる子ども靴の製品化を、という目標を靴のメーカーだけではなく、部材のメーカーにまで共有して頂き、何とか実現することになりました。

ということで、完成はしたものの、大人の靴以上にコストがかかっているから大人の靴同様の価格で販売するというにはなりませんので、当面は、このような靴でないと対処できないお子様向けに限定的に提供していくことになると思います。

多くの日本の子どもたちに本物の靴を履いてもらえるようになるまでには、まだまだ克服すべき課題がたくさんありますが、何はともあれ、満足できる子供靴を日本で作ることができたということは、私たちにとっては大きな前進ではあります。

ることではありませんでした。この私たちの思いを、自らの問題意識をもって主体的に受け止めて下さった大牟田の皆さん方が、何度も韓国へ足を運び、先方企業と粘り強く交渉し、技術提供の了解を得ることができました。それから3年、機械設備の輸入、それらの日本仕様への改良、そして技術の習得、さらには日本での生産に適した素材による製品の改良等々、国内生産への転換に伴う種々の課題を克服し、

やっと安定した生産が行なえるようになりました。いよいよ、障碍者が共に働ける場として開放されることとなりますので、近い将来、私たちの Anatomical Fußbett は、障碍のある方たちが「足のトラブルに困っている人たちのために」との思いで生産して下さる製品として供給されることになるでしょう。

さらに、この工場では、インソールの生産だけではなく、このインソールを装着できる靴の生産の一工程(手縫いによる底付け)を担える人材を育成し、障碍者を含む多様な人たちの就労の場としての充実を目指しています。

これらの靴は、ドイツ健康靴にも多い製法ですが、ポリウレタン製の本底生産が中国、東南アジアなどで行なわれるのが一般的で、また、その本底を縫い付ける人件費も安いことから、日本ではほぼ100%海外生産になっています。私たちも、従来は、このような製法の靴を生産しているメーカーに依頼し、オリジナルの製品を委託生産してもらっていましたが、当然生産自体は、ベトナム等の工場で行なわれていました。これらの靴の国内生産は、ポリウレタン底の国内生産が非常に少ない中では難しいと思われていましたが、各方面の協力



店の奥の工場に設置された機械で、インソールを成型中

となってきました。そこで、インソール生産に加えて、この部門をも大牟田で担おう、ということになり、すでに技術者養成の講習が始まりました。

本年中には、MADE IN Omuta の COUPEN も、出荷されることになるでしょう。

さらに、このほど、準備期間のために一時的に稼働させていた工場を、「足と靴の相談室ぐーぱ」と統合した新しい場所に移転し、足と靴に関する啓発活動の拠点として、靴や装具の提供という足部・脚部の疾患・障碍に対処する業務と、その業務に必要なインソールや靴などを障碍者が生産するという業務が、一体的に運営される体制が整ってきました。私たちが目指すドイツ整形外科靴技術の日本への普及のための拠点が、大牟田で産声を上げたといえるでしょう。



縫製の終わった甲革を、ひと針ひと針本底に縫い付ける(手縫い底付けの練習中)

## スニーカーも製品化されました

子供靴同様、お勧めできる靴がなくなって困っていたスニーカーも、製品化することができました。

ほとんど無数といえる大手メーカーの多種多様なスニーカーの中から、これならカスタムメイドのフットベッド(中敷)を入れて使って頂ける、というスニーカーを探すのに永年苦勞してきましたが、最後に残っていたいくつかも、とうとう廃番になってしまいました。そこで、このかん試作を続けていたスニーカーの製品化を急ぐことにし、今秋には提供できることになりそうです。

各種の競技用のスポーツシューズについてはスポーツメーカーが積極的に開発を進め、それぞれ特徴のある優れた製品もあるようですが、一般向けのスニーカーは、本来の機能性ではなく、安さや軽さや柔らかさが競われ、およそ靴とはいえないような代物が氾濫しています。

さらに困ったことに、日本では靴に対する医学的な規制

がないため、「O脚改善」「膝を守る」「シェイプアップ機能」等々の色々な「アイデア」が付加され大々的に宣伝されていますが、それらが靴の基本をわきまえていないがために、「アイデア」が思わぬトラブルの要因になっていることも良くあるのです。

そのようなスニーカーの現状の中での「犬の散歩や畑仕事には革靴というわけにはいかない」とのご要望に対して、何とか良いスニーカーを提供できないものかと考えてきましたが、革靴とは異なって、素材の問題等から少量生産が難しく、なかなかオリジナル製品に着手することができませんでした。

この程、苦勞の甲斐あって、限定された素材ではありましたが、何とかスニーカーといえる製品を完成させることができました。大量生産品のように、色や素材を自由に選ぶというわけにはいきませんが、どうしてもスニーカータイプを希望される方たちには、ご提供させていただきます。

